
天使の仕事

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の仕事

【Nコード】

N0771V

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

＊いや、悪かった。オヤジの気持ちがいま解ったよ。子供の相手って正直……すげーしんどい。

いや！ それ以上に疲れたのは！

※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

*少年

ハンター「ライカ・パーシエル」はブラブラと街中を歩いていた。ここはアメリカのアイオワ州、ウィンターセツト。深緑のカーゴパントとアサルトジャケットに普段用のタクティカルベスト。ブラウンの髪に青い瞳、そして彫りの深い顔立ちは体格の良い体型に見合っている。

「？」

後ろの方から慌ただしく走ってくる足音に眉をひそめて振り返ろうとした刹那――

「どわあっ!？」

何かが勢いよくぶつかってきて倒れ込んだ。

「な、なんだあっ!？」

「助けてくれよ!」

ぶつかってきた少年は凄い剣幕でライカに声を張り上げた。

「は……?」

突然の事に意味が解らず、赤茶色の髪に栗色の瞳の少年を見つめる。

「やっと捕まえたぞ」

「離せよ! 離せーっ!」

男たちに首根っこを掴まれて少年は引きずられるように遠ざかっていく。その瞳はライカに助けを求めている。

「待てよ」

「何?」

その声に男たち3人は振り返る。

「嫌がってるだろ」

「貴様には関係無い。引っ込んでろ」

「!」

胸を軽く突き飛ばされたその瞬間――

「うわっ!？」

その男を投げ飛ばした。アスファルトの地面に叩きつけられて悶絶する。

「きさま！」

それを見たもう1人の男が銃ハンドガンを取り出しライカに突きつけた。すかさずそれを蹴り上げる。

「いつ……っ!？」

驚いて上を見上げた男の顔に拳を一発。

「どうする？」

拳を解いて手をブラブラと振りながら少年を捕まえている男を睨み付けた。

「くっ、覚えていろ！」

男はお約束のセリフを吐き捨てて少年を突き放し逃げ去る。

「……」

少年はポカンとしてライカを見つめた。

「おじさん……強いんだね」

「あゝ？ “おじさん”？」

ピクリと片眉を吊り上げたが肩を落としてつぶやく。

「32歳はおじさんだよな」

溜息を吐き出して歩き出した。

「！ ま、待ってよ！」

「あん？ いいからどこへでも行けよ」

そう言っただけで離れていく男の背中を少年は睨み付ける。

「おじさん！ お願いだ……助けて」

「へ……?」

助けを求めた少年の話を聞かため近くのカフェに入った。

「父さん？」

「うん」

少年は向かいの席でオレンジジュースを飲みながら頷く。

「父さんが悪い奴らに捕まっちゃったんだ。助けに行ったらオレも捕まりそうになっちゃって」

「……」

いぶかしげな表情で少年を見やった。

俺が捨てられた時と同じくらいの年だ……道ばたで両親をずっと待っていた記憶がライカの脳裏によみがえる。

「頼むなら警察に行け」

「警察に行ったけど誰も相手してくれなかったんだよ！」

「俺に頼むと金がいるぜ」

「え……？」

「俺はハンターだ」

聞き返した少年にライカは静かにしかし誇らしげに応えた。

「ハンター？」

「依頼を受けて悪い奴を捕まえたり、色々やる人間の事だ」

「！じゃあ、あいつらを捕まえてよ！ 悪い奴らなんだ」

「言ったら。頼むと金がいる」

少年に人差し指を立てて軽く振った。

「お金……」

眉をひそめて目線を落とす。

「……」

気にはなるが俺にはどうする事も出来ない。すまないな……と溜息を吐き出す。

「お金なら……払うから」

「何？」

少年は勢いよく立ち上がりキリリと目を吊り上げた。

「一生かかっても払うから！」

「おまえ……」

肩を震わせて涙を浮かべ少年はすがるように発する。

「……名前を聞いてなかったな」

「ケビン！」

立ち上がりカフェをあとにした。

「で、なんで父さんは捕まったんだ？」

「わかんない」

「わかんないって……」

その言葉に啞然とした。

いや、子供に解らないのは当然か？　しかし、これではどう動いていいのか……思案した。

「あ……」

「お……？」

目の前にいる金髪の青年と目が合い互いに見合う。

「ベリル！」

「！　なんだっ……？」

抱きついてきた男に意味が解らず当惑した。

「この人誰？」

少年はライカに引きずられるようにしてレストランに連れ込まれた向かいに腰掛けている青年を見つめる。

「ベリルって言ってな、強い傭兵なんだ」

「！　傭兵？」

聞いた少年は青年に目を移す。金髪のショートヘアに鮮やかな緑の瞳……歳は25歳ほどだろうか。

ソフトデニムの黒いジーンズに濃いブルーのTシャツの上には象牙色の長袖シャツを合わせている。

「で……？」

コーヒーカップを手にして男に問いかける。

「手を貸してくれ」

「……」

「……」

互いに見合う。

「――っ」

「待て」

何か言おうとした彼を制止した。

「金は払うから頼む」

少年の隣で懇願するように目を向ける男に溜息を吐きつつ頭を抱える。

「ケビン」

「何？」

「父親について連れ去られる前に何か気付いた事は無いかね？」

「うーん……わかんない」

2人はガックリと肩を落とした。

「……」

強い傭兵……？ おじさんよりも全然若そうだけど……ライカと比べると強そうには見えない。

ライカの態度からしてベリルという人物にかなり信頼を寄せているようだ。少年はそれに怪訝な表情を浮かべる。

ライカは182？に体格もかなり良い、それとは逆にベリルは174？と細身だ。

見た目だけならベリルは弱く見えるかもしれないが、いざ闘えばライカは決して彼には勝てないのである。

積んできた経験と生まれ持った戦闘センスは見た目だけでは計る事は困難だ。

「！ そのペンダントは」

「あ……これ、父さんがくれたの」

少年が首に下げているペンダントに目がとまる。

「もらったとき何か言っていたか」

「大切なものだから大事にしろって」

「ベリル……？」

変な処が気になるんだな。と首をかしげる。

「君の父は何の仕事をしている」

「運送屋だけど」

「ふむ……」

それに少し考え込む。

「捕まる前に何を運んだか解るか」

「ジョージに聞けば解るかも」

「ジョージ？」とライカ。

「父さんの会社の人」

「では行ってみよう」

残ったコーヒーを飲み干し立ち上がった。

*まあ頑張れ

「え？ ブルースが運んでた物？」

3人は少年の父が務めている会社を尋ねた。大きなトラックが何台も並び積まれる荷物を待っている。

「うむ、それが何か知りたいのだが」

ガタイの良い男はベリルに怪訝な表情を浮かべた。

「ああ！ 思い出した。奴が運んだのは小麦粉だっと思うぜ」

しかし彼がサイフからちらりと1ドル札を数枚見せると男は途端に饒舌になる。
じょうぜつ

「小麦粉？」

ライカが聞き返すと男はさらに続けた。

「個人向けの商品らしくてな。数は少なかったぜ。おうケビン！ 親父さんは今日休みか？」

「……っ」

「ええ、ちょっと腰を痛めましてね。こないだの荷物がなんだったのか忘れたから聞きに行ってくれと友人の我々が頼まりました。しばらく仕事は休むそうです」

応えようとした少年の肩に手を置きベリルが発した。

「ああ、なんだ。そういう事か……初めからそう言ってくれよ」
控えめに差し出された手にベリルは苦笑いで札を数枚乗せる。

「小麦粉って言ってたな」

「うむ」

会社を離れレンガ敷きの補導を歩く。

「処で」

「何……？」

聞き返したライカに親指を後ろに示した。

「どうやら彼らの狙いはケビンらしい」

「！」

視線だけ入るように軽く振り返る。角の所で、こちらの動きを見つめている男が2人いた。

「本人たちに聞くのが一番だろう」

「だな」

言ったライカに“シュタ！”と手を軽く挙げる。

「まあ頑張れ」

「……へ？」

しばらく呆然として、遠ざかっていく青年を呼び止める。

「ちよっ……！？」 待てよベリル！」

「サポートくらいはしてやる。しばらく1人でやってみろ」

「おい……マジかよ」

1人でやってみろって……どうやって？ 安心しきっていたライカはどうしていいか解らずにオロオロした。

「！」

ふと少年を見ると不安そうな瞳がライカを見つめていた。

だめだ、ケビンを不安にさせては……ライカは胸を張った。

「奴らを捕まえればいいんだな」

やってやるさ……ぼそりとつぶやきそのまま歩き出した。

「！」

男たちは後を追う。

スツと角を曲がった——見失うまうと男たちは駆け出す。

「うっ！？」

曲がった瞬間ライカの姿が目飛び込み体を強ばらせた。

「このっ」

1人の男を殴ったあと、すぐにもう1人の男の腕を掴んで投げ飛ばす。

「くそっ……」

殴られて倒れ込んだ男は胸元から銃を取り出しライカに銃口を向けた。

「!？」

撃たれる!？

そう思った刹那――

「ぐっ!？」

男の銃ははじかれて虚しく地面に転がった。驚く男と同じくライカも少し驚いたがチャンスを逃してはならないとすぐに切り替えて男のあごにパンチを食らわせる。

「……？」

今のはベリル？ 狙撃してくれたのか……と荒い息を整え遠くを見つめた。

「さあ、大人しく吐いてもらおうか」

男たちをベルトで縛り上げ問いかける。しかし仏頂面をライカに向けるだけだ。

「父さんを返せよ！」

「やめろケビン」

「ククク……」

「! 何がおかしい」

喉の奥から笑いをこぼした男に睨みを利かせる。

「諦めな。お前の親父はもう死んでる」

「……ってめえ」

ライカはキレて殴りかかろうとした。

しかし――

“ゴカンッ!”

「!？」

銀色の輝きを放つアルミの一斗缶がライカの頭を直撃した。

「~~~~~」

脳天直撃の衝撃に声にならずに悶絶。

数秒後……

「いっつてええええー!？」

ようやく声が出て頭を押さえた。

「い、いくら中身は入ってないとはいえ……かつ、角……カドは痛すぎる……っ」

うずくまって涙を流し、一斗缶をギロリと睨み付けて建物を見上げる。

「ベリルー！ どこだごるあっ！」

当然、返事が返ってくるハズもなく……ふるふると拳をふるわせて気を取り直した。

「くそっ、覚えてやがれ」

そうだ怒ってる場合じゃない。冷静に、冷静に……

「じゃあ何だ、親父から何かの情報が聞き出せなかったんだな。で息子が無か持ってると思ったのか？」

その言葉に男はピクリと反応した。

ドンピシャ！ ライカは心の中でガッツポーズして続ける。

「子供が持てる程度のモノってことだよな」

男はますます反応を大きくした。

*天の声

「！」

そういえばベリルがケビンのペンダントに興味を持っていたな…
…とライカはハタと気付く。

「ケビンさっきの——」

“ガッシャアアアアーン！！”

「……」

「……」

「……」

「……」

上から落ちてきた植木鉢に全員が沈黙した。

「マジか……」

当てる気は無かったとしても、これは怖いぞベリル……重力によ
って砕かれた植木鉢を見下ろす。

こいつらに情報を渡すような事をするなってことか……恐怖から
逃れるように気を取り直すと、彼が植木鉢を落とした理由を考察し
た。

これ以上こいつらから聞き出せることは無さそうだ。

「行こう」

「え、でもこいつらは？」

「聞いても答えないさ。どうせまた追いかけてくるし」

しかし、ロープ1本で縛っているからすぐに追いかけてくるよな
……と考えていると——上から手錠が4つ降ってきた。

「……」

ここまでくると一緒にいてもいいんじゃないか？ と手錠を見つ
める。

とりあえず手錠をかけて2人の男を置き去りにした。

「ねえ」

「なんだ」

少年はモジモジとしながら発する。

「おしっこ」

「はあ？」

仕方なく小さなマーケットに入ってトイレを借りる事にした。そこに、着信を伝える着メロが鳴り響く。

「はい」

<マナーモードにしておけ>

ベリルの声だ。

「すまん……で、何だよ？」

<丁度良い、そこで今から言うものを買っておけ>

「そんなものをなんで……」

<いいから買え>

電話は切られた。

「こんなもんどうすんだ？」

出来るだけ噴射力の強そうなものは……と眉をひそめてスプレー殺虫剤を手にする。

買った殺虫剤をベストのポケットにぐいと押し込めて、トイレから戻ってきた少年を連れて店をあとにした。

「疲れたよ」

「またかよ」

誰のためにやってると思ってんだ……眉間にしわを寄せる。

俺もガキの頃ってこうだったのかな？　だとしたらオヤジには悪い事したな……と過去を思い起こす。

ライカが10歳のとき捨てられていた処を拾って育てたのがハンターであったクリア・セシエルだった。

彼は旅好きとその容姿が相まって『流浪の天使』と呼ばれていた。

壮絶な最期を遂げたが、そのときの事をライカは未だ鮮明に覚えている。

血まみれになりながらもその鮮やかな動きを止めなかったセシエル……その口元には悪魔の笑みを湛えていた。

最後まで彼はライカの“父”だったのだ。

「……っ」

やばっ泣きそうだ……頭を振って気を取り直す。

「そうだケビン、ペンダント見せてくれ」

「いいよ」

首からペンダントを外して手渡す。

「うん……？」

ロケットだ。中には女性の写真が入っている。

「母さん。病気で死んじゃった」

「……そうか」

陰りを見せる少年に応えさらによく見つめる。

「！」

写真の裏に何かあるようだった。慎重に写真をめくる。

「！ マイクロSD？」

写真を元に戻してペンダントをケビンに返し、入っていたマイクロSDを携帯に差し込んだ。

「うーん……解像度が高すぎて携帯じゃ見れないな」

*本格始動

考えてそのまま電話をかけた。

<どうした>

「マイクロSDなんだけどさ……」

ベリルの声に泣きつくように発する。

<待て、今行く>

電話が切れると同時に側の茂みから出てきたベリルに目を据わら
て見つめた。

「……そんなトコで何してたんだ」

「イチャついてる恋人を覗いていた」

「マジか」

「ウソだ」

殴ってやりたい……拳をふるわせる。

そんな彼にさして反応するでもなく、ベリルはジーンズのバック
ポケットから携帯よりも大きな機械を取り出した。

「モバイルパソコン……用意がいいな」

「ペンダントに入るほどのサイズならマイクロSDが限界だと思っ
ていた」

「……」

初めから気付いてたならそのときに取れよな……相手の行動を眺
めて遊ぶ処は相変わらずか……眉をひそめた。

「ドル札？」

ディスプレイに映されたものに怪訝な表情を浮かべる。

「かなり精巧だ」

「これってもしかして……」

「偽札の原盤だろう。作成するプログラムも入っている」

ケビンの父親は小麦粉の中にこれを見つけて抜き取ったのだ。ど
ういう理由で抜き取ったのかは本人に聞く他は無いが……確認した

ベリルはモバイルパソコンを閉じて口を開く。

「これは私が何とかしよう。2人はこのまま移動してくれ」

「え？」

呆然とする2人に彼は続けた。

「情報が漏れていないように装うためだ」

「そうか、それなら仕方ないな」

「それで父さんが助かるんだね！」

少年に応えるように微笑む。すると少年は鼻息荒くズンズンと歩き出した。

やる気満々だ。

「彼を頼むよ」

ライカにそう言ってどこかへ行ってしまった。

2人がしばらく歩いていると――

「疲れたよ」

「またかよ……」

どこか公園のベンチを探すか……とキョロキョロしたとき背後から敵意を感じて振り返ると、3人の男がハンドガンを手にもちらに歩いてきていた。

「!？」

こいつらなりふり構わず襲ってきやがった！　ライカは腰の銃に手をかけるが、間に合わないと瞬時に理解する。

相手は3人、こちらが一発撃つ間に3発返ってくる。だめか!？

その時――ライカの後ろから影さらりと出てきた。

影はライカのベストからスツと殺虫剤を抜き取りジッポライターに火を灯して男たちに向かって噴射した。

「ベリル？」

「うわっ!？」

さながら火炎噴射のような炎にたじろいだ男たちをすかさず叩き伏せる。

「……」

なるほど、それで殺虫剤か……ライカは感心して小さく溜息を吐き出すベリルを見つめた。

「凄い」

ホントに強いんだこの人……爽やかな笑顔を向けたベリルを少年は凝視した。

手錠で3人の男たちを拘束したあとゴソゴソと物色し始める。

「結構持ってるな」

「それやめろよ……」

ライカは頭を抱えた。

「泥棒だよ……」

「相手は悪者なのだ。構わん」

しれっと応える彼に眉をひそめる。

「ベリルのは半分いやがらせだ」

「さてと。とりあえず……」

立ち上がり話題を変えるように発して男たちの1人に視線を合わせるようにしゃがみ込んだ。

「ボスに私の名前を言ってみるがいい」

「！ なに？」

「顔色を変えたらお前たちの組織は終わりだろう」

「何を言ってる……？」

「ベリル・レジデントだ」

念を押すように言うのと立ち上がった。

「お前たちが何を探しているのか知らんが子供を追い回すのはいただけんな」

「！」

なに言ってるんだ？ 持ってるのに……そう思ったライカをエメルドの瞳で睨み付ける。

悟られるなっつか、悪かったよ……すごすごと視線を泳がせた。

*ボスの顔

「ああ、それと」

ベリルはさらに付け加える。

「少年の父親を殺したらとんでもない事になるよ。と伝えておいてくれ」

にっこりと笑って手を軽く振り歩き出した彼の後を2人は追う。

「あ、あれで良かったのかよ」

「構わん。こちらもちらで動いている」

「え……？」

「私がただ見物してただけだと思ったのかね？ ルカに連絡して彼らの組織を探ってもらっている」

「！ ルカ……『探し屋』か」

世界の情報を掌握しているプロの探し屋——相手は人でも組織でもなんでもござれだ。そのぶん高額だが、確かな情報を提供してくれる。

さすがだと言いたいが、ライカは目を据わらせた。

「でも……見物はしてた訳だな」

「……」

その言葉に目を泳がせる。

「そろそろルカから連絡が入る頃だろう」

誤魔化すように電話を手にとると携帯が小刻みに震えた。

「どうだ……ふむ、すまん」

「どうだった？」

携帯をバックポケットに仕舞うベリルに問いかける。

「組織は解ったがケビンの父親が捕まっている場所はまだまだそうだ」

「そうか……」

この短時間で組織を探り当てた事には感謝するよ……相変わらず仕事の早いルカに感心した。

「これからは私も同行しよう」

「!? いいのか？」

「私の名を出してしまったからな。本人がいないのではないかなんぞろう」

言って微笑んだ。

「なんだと……ベリル・レジデント？」

恰幅の良い仏頂面をした男が部下から聞いた名前に応えた。

「奴が言えと……」

「まさか……そんな事が……っ」

濃いブラウンの髪は白髪交じりだが威厳を保つように前髪をアツプさせ、小さな青い瞳に少しの野心が宿っている事が窺える。

「……ボス？」

明らかに動揺を見せる男に部下たちは怪訝な表情を浮かべる。

「どんな姿をしていた。金髪で緑の瞳？」

「はい」

「年は……見た目はどうだ」

「は？ 25歳くらいでした」

聞いた瞬間「オーノー！」と言わんばかりのリアクションをしてみるみる顔色が変わっていった。

「それで奴はなんと言ってたんだ」

「ガキの父親を殺したらとんでもない事になる……と」

ガタガタと震え出す男に部下は怪訝な表情を浮かべる。

「一体どうしたんですボス。そんなガキすぐに殺してしまえば――」

「馬鹿者！ そんな事をすればただじゃすまんぞ！」

カツと目を見開いて部下に言い聞かせた。

「そのベリルとかいう奴は一体なんなんですか？」

男のあまりにも反応に部下は眉をひそめる。

「傭兵の中でも群を抜いて凄い奴だ。とても適う相手じゃない」
落ち着かせるように葉巻を手取る。

「わしが傭兵の頃に一度だけ会った事がある」

「！　ボスが傭兵の頃って10年以上も前ですよ。奴はどう見てもそんな時にいるような年じゃ……」

「お前たちは知らない方がいい。これ以上はな。裏の世界の事だ」

「はあ……」

我々の世界だって裏の世界と呼ばれているのに、傭兵の世界はさらに裏なのか……部下は片眉をぴくりと上げた。

「……」

ボスと呼ばれる男は口をつぐむ。

言える訳が無いだろう……奴が不老不死などと！　裏の世界では“公然の秘密”扱いだがそれを口にしてはいけない事くらいわしでも解る。

ケチな組織だが殺される事はない。しかし奴の正体をやたらと口に出せば殺されるのは確実だ……殺しに来るのは本人ではなくまったく面識の無い奴だろう。奴の存在を公にしたくないさまざまな理由を持つ者が大勢いるんだ。

そんな事よりこれからどうするかだ！　奴に睨まれて無事でいられた組織は無いんだ。いつそこのまま逃げようかな……男は心の中でつぶやいた。

*集合

3人はカフェで喉を潤し疲れを癒していた。

「ふむ……」

ルカが探り当てた組織はそれほど大きくは無い。偽札を造るような組織とは思えないが……作り方を入手したとしてもそれを造るだけの度胸と技術者と組織としての規模が必要だ……彼は端正な顔立ちに思案の表情が浮かべる。

「まあ良いか。ケビン、それを大事に持っている」

「うん」

少年はペンダントをキュツと握りしめた。マイクロSDをケビンに返したのだ。何も無しでは相手に気付かれる。

「これからどうするんだ？」

カフェを出て歩きながらライカが尋ねた。

「さて、どうしたものか」

「いつまでこんな事やるんだよっ」

しれっと応える彼に苛つき気味に発する。

「もちろん、そろそろこちらから仕掛けさせてもらおう」

「！」

そう言っって軽く手を挙げるとあちこちから男たちが現れた。その中の何人かは見知った顔だ。

「仲間を呼んでたのか……」

「相手は組織だ。多い方がいい」

素人の組織だがね……と鼻で笑った。

「おい、なんだ……?」

ベリルたちを監視していた男2人が続々と現れる男たちに目を丸くした。普通の恰好はしているが、銃を携帯している事が窺える。

もしかして、とんでもない奴を相手にしてるんじゃないか……男たちは互いに顔を見合わせて表情を無くす。

「何やってる」

「!？」

背後から野太い声が聞こえて振り返ると、いかつい男が立っていた。

「おいベリル」

呼ばれた方向に一同が顔を向ける。するとスーツを着た男2人の首根っこを捕まえてガタイの良い男が歩いてくるのが見えた。

「ムサファか」

そうして2人の男を中心に投げ置くように離して腕を組む。

「こいつらどうする？」

「殺しちゃおうぜ」

「面倒だもんな」

「!？」

周りからの声に男たちは震えた。

「解放してやれ」

「いいのか？」

笑って発したベリルにムサファは聞き返す。

「どのみち組織は潰す。帰る場所など無いよ」

あからさまに言い捨てられ、ヒイイイ！!?

と2人の男はガ

タガタと震えた。

「……」

傭兵っていうのはこういう嫌がらせが好きなのかね……呆れてその光景を眺めた。

個人で動く事の多いハンターにとって彼らのノリについて行けない処がライカにはあった。

しかし、冗談を言い合っている彼らの表情を見ていると羨ましく思うときもある。

「ボスの居場所はわかってるのか？」

「うむ。ルカが調べた」

「じゃあこれから行くか」

自然と連携が取れるのも仲間だからだ。

「そうだな……もう少し様子を見よう」

「OK」

「了解」

「アイサー」

彼がぼそりと発すると口々に応え蜘蛛の子を散らすようにあつという間にいなくなった。

行動早え……ライカとケ빈は啞然とした。

それを見送ったあとベリルは2人の男に視線を合わせるようにしやがみ込んだ。

「それでだ」

「ヒッ!？」

「な、なんだよ……」

ニツコリと笑いかけられ男たちはビクついた。

＊作戦

「これからお前たちを解放するが……」

「……」

後の言葉を固唾を吞んで待つ。

「現状維持で頼む」

「……え？」

「こちらにも都合というものがあるのでね。お前たちには監視を続けてもらいたい」

爽やかな笑顔で告げられた。

「そっ、そんな事するハズが……っ」

「もちろんお前たちを監視しているがね。変な動きを見せたらどうなるかは解るはずだ」

言葉を切って発しニヤリと笑みを浮かべる。

「!？」

ひっひええええ！？ 男たちは恐怖で歯を鳴らした。

「はあ……」

長生きすると人は意地悪くなるんだろうか……面白がっている彼に頭を抱える。

男たちを解放したあと、隣を歩くベリルを見やった。

いや、違うな。ベリルの性格が悪いんだ。きつとそうだ……思えば今までも色々一意地悪をされてきた。数知れない嫌がらせを思い出してふつつつと怒りが湧いてくる。

あの一斗缶は極めつけだった。一瞬、意識が遠のいたぜ……しかしどうやったってベリルには適わない。

死なないという以前にベリルは師匠であるからだ。

育ての親であるセシエルが死んだ2年後にベリルと出会い一度は別れたものの。ベリルと再会して彼の側で1年を過ごしたあと他の

傭兵たちの技を学び、いまこうして独り立ち出来た。

セシエルとベリルは強い絆で結ばれた盟友だったのだ――

「ライカ」

「!？」

呼ばれてハッとする。

「今は物思いにふけている場合ではない」

「わ、わかってるよ……」

言い当てられたようで少し戸惑い気味に発する。

「彼らに何か連絡があったようだ」

「!」

監視させられている男たちに目を移すと、彼らが無線に聞き入っていた。しばらくして男たちがおずおずと歩いてくる。

「内容は」

腕を組んで話を待つベリルに少し視線を泳がせて発する。

「ガキの父親と情報を交換だ」

「! 父さん？」

喜びで前に出ようとする少年を制止した。

「いいだろう。場所は」

「この先の廃工場に1時間後」

レストランで時間を潰している間、そわそわして落ち着かない。

「父さん」

ケ빈は嬉しくて待ちきれなかった。

「手順は怠るな」

「大丈夫だって」

ベリルが念を押すように発すると少年は笑顔で応え何も入っていないコップのストローをしきりにすすする。

ウェイトレス呼んで新しいジュースとコーヒーを注文した。

「なあ……」

「なんだ」

「なんでこんな回りくどい方法取るんだ？　ボスのトコ行って、脅しかければいいじゃないか」

怪訝な面持ちで問いかけるライカに彼は運ばれてきたコーヒーを傾けて口を開く。

「父親を助けるまではお前の仕事だ。その先は私の仕事なのだよ」

「え？」

「そろそろ時間だ」

ベリルはそう言って立ち上がる。

「あ……っ」

どういう意味なんだ？

3人は指定された廃工場を訪れた——中に入ると数人の人影が見える。

「！　父さん！」

「ケビン！」

顔を腫らした男が叫ぶと他の男が強く揺らして制止した。10mほど離れた場所で立ち止まる。

「持ってきたんだろうな！」

「それが何なのか解らないのでね。探せずにいるんだ」

ベリルが肩をすくめて発するとしばらく沈黙し、おもむろに……

「マイクロSDだ。ガキが何かに入れてるハズだ」

「！　マイクロSDか。ケビン何か持ってるかね？」

「え……知らないよ」

白々しいやりとりにライカは眉をひそめた。

*交換

「どうやって渡した。言え！」

男はケビンの父親に銃を突きつけて脅しをかけた。

「ケビンの……ペンダントだ」

父親は観念したようにうなだれて応える。

「！ 渡せ」

男は手を差し出す。

「でも……」

「いいから渡すんだ」

こづかれた父親はケビンに言い聞かせた。少年はおずおずとペンダントを首から外すとベリルに手渡す。

「彼と交換だ」

「いいだろう」

ペンダントを手に行っているベリルが歩み寄り、1人の男が後ろ手に手錠をかけられている父親を半ば引きずって前に進む。

ほぼ同時に手を出す——しかし男はペンダントを奪って父親をグイと引き寄せた。

「！？ 父さんっ」

その刹那、一斉に武器を手を持ち銃撃戦が開始されライカは慌てて少年を担ぎ盾になる場所に移動した。

「ベリル！？」

たじろがずに撃ち続けるベリルの姿が映る。

「なにしてるんだ！」

セシエルが死んだ時の光景が脳裏に甦り体が強ばった。

「ベリルーっ！」

彼の叫びにも反応せずベリルは立ち止まらずにハンドガンを構え相手に照準を合わせつつ撃ち続けた。

そうして彼が止まった頃……相手の男たちはうずくまって唸りを

上げていた。

「ベリル……」

2人は恐る恐る彼に近づく。

「私は死なないよライカ」

笑って振り返る。

「……ベリル」

そうだった、ベリルは不死だった……ホッとした。

「少々、痛かったがね」

ゲフツと咳き込む。

「うわっ!？ 痛いどころじゃねえだろっ!？」

1発、胸に見事に命中していたらしく胸の辺りから血がにじんでいた。

「心配ない。心臓には当らなかったため意識は遠のかなかった」

「そういう問題じゃねえよ……」

ドキドキして胸を押さえる。

「父さん！」

「ケビン！」

感動の再会を果たした2人に顔がほころぶ。

「あれ？ 1人足りないんじゃないかね？」

「ああ、逃がしてしまった」

「！ なんだってえー!？」

「まあ良いではないか。父親も助かったのだし」

声を張り上げたライカに彼はしれっと応えた。

「そりゃそうだけど」

『傭兵の仕事』とやらはどうなったんだよ……

「！ 取り返した？ よくやったぞ」

ボスはビルの部屋で連絡を受けて歓喜した。

「早くそれを持って行け」

まさかベリルから取り返せるとは……わしの部下は素晴らしい！

「はい」

部下の背中を見送って溜息を吐き出し豪華なチェアに腰を落とした。

「！」

葉巻を手にしようとしたそのときドアが開く音が聞こえて視線を上げる。

「なっ！？」

現れた人物にギョツとして立ち上がった。

「やあ」

「どっ……どうしてここに！？」

笑顔で挨拶するベリルに目を見開く。

「イワンか」

「！ お、覚えていてくれたかあゝ光栄だな」

心にもないことを発した顔は引きつっている。

「一度組んだ相手は忘れないのでね」

ほんのちよろつと組んだだけなのに恐ろしい記憶力だな……男は恐怖で身を固めた。

*落胆

「処で」

「はいっ」

硬直して声がうわずる。

「マイクロSDはちゃんと相手に渡せたかね？」

「へ……？」

ニヤリと笑ったベリルに血の気が引いた。

「ま、まさか。初めから解ってて……」

引きつった彼の顔を一瞥しデスクに腰を落とす。

「この組織が偽札まで手を出すものではないと解っていた。ならば答えは1つだ」

もっと大きな組織の運び屋をしていた……目を据わらせて言い放つとイワンはガタガタと体を震わせた。

「仲間がすでに向かっている」

「！？　なんだって？」

「逃げるなら今の内だぞ」

男に顔を向けて静かに発する。

「う……」

目を見開き恐怖におののいている男を確認し部屋を後にした。

一方——組織のビルに入っていたベリルを待つライカたち。

「……」

一体なんの話をしに来たんだろう？　とライカはベリルのピックアップアップトラックに背を預けピルを見上げる。

「あ、そうだ。ケビン」

ポケットからペンダントを取り出して少年に手渡す。

実はマイクロSDの入ったペンダントはベリルが用意した偽物だったのだ。彼らが奪ったその中には発信器が取り付けられていて、

仲間たちはそれを追跡している最中である。

「！」

しばらくしてビルから出てきたベリルを確認する。

「何の話をしてたんだ？」

それには答えず車に乗り込み、発進せずにヘッドセットを取り出して左耳に装着し会話を始めた。

「ムサファ、そちらの様子は……そうか。引き続きよろしく頼む」
会話を終えるとヘッドセットを外しハンドルに両手を置いて話を切り出した。

「マーフィと言ったかな」

「あ、ああ」

ミラー越しに後部座席に座っているケビンの父親を一瞥する。

「彼のためにも、今の仕事は辞めるべきだとは思わないかね」

「！？」

3人はそれぞれに驚いてベリルを見やった。

「ベリル、なに言って……」

聞き返したライカに見向きもせず続ける。

「お前はケビンが身を滅ぼす事を望むか」

「だからどういう意味だよ！」

意味の解らないライカは声を張り上げた。

「運び屋という仕事は大金と命を交換するものだ」

ベリルは声を低くして険しい表情を浮かべる。

「運び屋！？」

ライカは目を丸くしてマーフィを見つめた。

「……」

男はケビンをギュッと強く抱きしめる。

「彼が運んでいたのは小麦粉ではない。マイクロSDもその中に入っていたのだろう」

「……君の言う通りだ」

「！ 父さん？」

「俺は、奴らから金をもっとむしり取るためにSDカードを盗んだ。それがこんな事に……」

「お前が運んだ薬で何人の命が消えただろうね。命と金を引き替えにした」

「それは……っ」

眉間にしわを寄せる。

「これ以上お前を責めるつもりは無いよ。決めるのはお前自身だ」

「こんなこと……いけないと解ってはいたのに抜け出せなかったんだ。俺は弱い人間だ」

「父さん……」

「では、これを機に足を洗う事だ」

「そうだな。そうしたい」

深い溜息を吐く彼にベリルはイタズラっぽく笑った。

「どのみち、この組織の運び屋はもう出来ないがね」

「……え？」

「私が脅しをかけたのだ。ボスは田舎にでも帰って農業でもするだろう」

「……」

ニコニコと言い放つ彼に一同は二の句が継げなかった。

*大団円？

「……ってことは、いま向かってるのは偽札の原盤を運ばせていた組織？」

尋ねたライカに無言で頷く。

「……」

なんかややこしいぞ……ケビンの親父がイワンでボスの麻薬組織の運び屋をしていて、その麻薬組織はさらに別の組織の運び屋をしていたってことか？

「企業で言えば下請け会社ってとこかな」

「その例えは正しいんか……？」

「ルカからボスの名を聞いてこちらはすぐに片が付くと思っていた。問題はその上だ」

イワンは現役の頃から小ずるい処があったからね……ベリルは笑って応える。

「彼らを許すほど私の許容は大きくはない」

一瞬ゾクリとする。

いつものベリルじゃない。そんなに相手の組織は悪いのか……彼の醸し出す存在感が変わったことに息を呑んだ。

犯罪組織なんて数えればきりが無い。そんなものにいちいち怒っていたのでは神経が持たない……ベリルはそう言いながら輝くエメラルドの瞳を曇らせる。

彼に何があるのか——それは誰も知らない。

「ライカ」

「！ なに？」

「どうするね」

「なにを……」

ライカを一瞥して続ける。

「お前も参加するのか」

「あ、おう」

呆然としたまま応えたライカに小さく笑った。

所変わって偽札の原盤を運ばせた組織の内部——1人の男が原盤と作成プログラムの入ったSDカードを受け取り中身を確認している最中だ。

「よし、大丈夫だな」

それをパソコンで確認しつつ発する。

「！？ 待てっなんだこれは」

画面を見ていたもう1人の男が異変に気がつき声を上げた。

「どうした？」

後ろにいた男を一瞥しディスプレイに目を移す。

すると……画面がユラユラと揺れ出しそこにいた3人の男は怪訝な表情を浮かべて見つめた。

そして——『自爆します』

という文字が画面中央に表示されたあと、プツン……とそれきりパソコンは何も言わなくなった。

「……」

「……」

「……どうということだ」

「コンピュータウイルス……？」

移動中の車内でライカは眉をひそめた。

「うむ」

データをコピーし別のSDカードに移してウイルスを忍ばせたのだ。

「私がプログラムした特別製でね。彼らのパソコンは使い物にならなくなっているだろう」

ベリルはクックツと喉の奥から絞り出すように笑った。

パソコン内部のデータを食い荒らしたあとに自らのデータも破壊

して終了する恐怖のプログラム――

愛称は『自爆くん』

「さすがにあれだけのデータをSDカードに入れるのには苦労した」
仕方なく持っていた最高容量のカードを使った……しれっと言っ
てのけるベリルに呆れて頭を抱えた。

「さて、そろそろ着くぞ」

「！」

顔を上げるとアスファルトの駐車場が視界に入る。その向こうに
横長だと思われる建物があつた。

車を駐めて外に出ると、すでに仲間たちが準備を済ませていた。

「……」

活気のある雰囲気にはライカは懐かしさで目を細める。

「ベリル！」

呼びながら手を挙げて近づいてくるムサファに彼も同じく手を挙
げて応えた。

「様子は」

「中であわてふためいてるようだ」

それにニヤリとし手を挙げて合図すると仲間たちが集まってくる。

その様子をベリルの車の中でケビンとマーフィはじっと見つめて
いた。

「父さん」

「！」

少年はふいに口を開く。

「オレ……優しい父さんが好きだ」

「解ってる。解ってるよケビン」

息子の頭を優しくなでると少年は父に抱きついた。

「作戦は覚えたな」

彼の言葉に一同は頷く。

「決行だ」

一斉に散らばっていく——組織の場所が街から離れていて丁度良い。

ベリルは昼間だというのに作戦を決行した。

『時間はいらない』

それが彼の出した結論だ。

少年が警察に駆け込んでも動かなかった処を見ると警察ともつるんでいる。ならばここに何があっても警察は沈黙を続けるだろう。

「!?!? なんだっ!?!」

建物内にいた男たちは突然、響き渡ったガラスの割れる音に驚く。

「うわあっ!」

「ひいっ!?!」

そうしてあっという間に囲まれ男たち3人はいくつもの銃口に勢いよく両手を挙げた。

「……」

俺が参加するかどうかって聞く意味あったのか……? ライカはあっけにとられてその光景を見つめた。

*そして

他の部屋の制圧も終えひとまずの解決を見る。

「こいつらどうするんだ？」

「警察に引き渡す」

「さすがにこれだけの証拠を出されては動かない訳にはいかんだろう」

怪訝な表情を浮かべたライカに笑みを浮かべて発した。

「引き上げる」

「おう！」

「またな」

口々に別れの挨拶を交わし仲間たちはそれぞれの車に乗り込んで去っていく。

「マーフィ」

それを見送ったあと、彼を呼び寄せやや見上げた。

「罪を償う気はあるか」

その問いに無言で首を縦に振ると柔らかに微笑んでSDカードを手渡す。

「行くぞ」

「おう」

すげー面倒だったけど。しんどかったけど楽しかった……ライカは少年を見下ろして今までの事を振り返った。

「ケビン。親父さんを大事にするんだぞ」

「うん」

車に乗り込もうとしたライカを少年は呼び止める。

「ライカ！」

「！」

振り返ると少年が勢いよく抱きついてきた。

「ありがとう」

少し涙を溜めた瞳がライカを見上げ、ぐっところえて視線を移す。

「ベリルも」

彼は軽く手を挙げて応えた。

「！」

遠くからサイレンの音が微かに聞こえて車に乗り込み、ゆつくりと発進する。

ライカは遠ざかる2人の影を見て安心したようにシートに座り直す。

「ありがとな」

「構わんよ」

なんだかんだ言ってもベリルは頼りになる。

「金は請求するぞ」

「え？ ああ、うん」

なんだか気が抜けた……ライカは外を見つめて適当に答えた。
育ての親だったセシエルの事を思い起こす。

『ベリルとセシエルの闘い方は似ている』と言った人がいた。

確かにそうかもしれない……鮮やかに流れるような動きは見る人を魅了する。だからベリルを見ているとセシエルと重なる処があるんだ。

「オヤジ……」

ライカはぼそりとつぶやいた。

それから数日後――

「なんだこりゃああー!?!」

ライカの元に請求書が届いてそんな気分も吹っ飛んだ。請求書を握りしめ体を震わせる。

「な、な……なんで俺がベリルが呼んだ奴らの分まで支払う事になっただよ!?!」

1人1万ドルだとう!?! 大して危険な仕事でも無かっただろう

が！

「最後の最後まで嫌がらせかテメー！」
ライカの叫び声は虚しく空に散っていった。

END

今作中のレートは1アメリカドル＝95円。

***そして（後書き）**

＊最後まで暑き愛くださり、ありがとうございますです。
皆様が少しでも楽しんでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0771v/>

天使の仕事

2011年8月30日03時25分発行